Nuzhat al-Qulūb に現れるルームの諸都市

井谷鋼造

はじめに

本稿でその一部を選訳、紹介するのはヒジラ暦七四〇年（西暦一三四〇年）に完成した Ḥamd al-Allāh Mustawfī Qazwīnī の著作 *Nuzhat al-Qulūb*（『心魂の歓喜』）である。著者ハムドゥッラー・カズヴィーニーはそのニスバのとおりイランのカズヴィーンの出身で、当時西アジアを支配していたモンゴル人政権イルハン国の財務官僚を務めた人物であった。彼はまたここで紹介する *Nuzhat al-Qulūb* の他に *Tārīkh-i Guzīda*（『選史』）と名付けられたペルシア語散文史書（一三三〇年完成）及び、*Ẓafar-Nāma*（『勝利書』）の名を持つ七万五千バイトのペルシア語押韻史詩（一三三五年完成）の作者でもあった。

Nuzhat al-Qulūb はこれら二つの史書、史詩とは異なり、全体はペルシア語で書かれた宇宙誌の体裁を取っている。すなわち、天球、天体や大地を構成する諸要素の創造、居住可能空間について述べた序言に続いて、第一話（動植鉱三界の創成について）、第二話（人間の肉体の諸器官とそれらの機能について）、第三話（地理誌）の四部から成り、各話は更に三部以上に細分されている。*Nuzhat* の序言には著者ハムドゥッラーが著作に当たって参照した二二の書名が挙げられており、有名なビールーニーの *Āthār al-Bāqīya* やイブン・フルダーズビフの *al-Masālik w-al-Mamālik*、イブヌル・バルヒーの *Fārs-Nāma*、ナスィールッディーン・トゥースィーの *Tansūq-Nāma-yi Īlkhānī* 等は *Nuzhat* 著述の重要な情報源となったであろうと考えられる。

さて *Nuzhat* の本文を構成する三話のうち最も有名で且つ西アジアの歴史研究にとって有益な部分は第三話地理誌である。この第三話は本文四部と終章に分かたれ、その第二部 Īrānzamīn 地誌は更に maṭla', maqṣad, makhlaṣ に三区分され、最後に maqṣad がイラーク・アラブからギーラーンに至る二〇章からなる地方別に細分されている。イーラーンザミーンとは当時のイルハン

国支配領域を指し、西端はルーム、北はシルヴァーンとグシタースピー、南はイラーク・アラブからマクラーン、東はホラサーンに至る諸地域に囲まれた「イラン地」のことである。本稿で一部を選訳するルーム地方はセルジュク朝時代（西暦一一世紀後半）になって初めてイスラーム世界に加えられた地域であり、西暦九―一〇世紀盛んに著わされたアラブの地理書群にもまとまった地誌的情報が遺されていない。この意味で *Nuzhat* のルームに関する記録はペルシア語テクストの校訂者 Guy Le Strange がテクストを解説した緒言で述べている如く、モンゴル人支配時代のルームについての比類ない貴重な史料ともなっている。

Nuzhat のルームに関する記述は maqsad の第七章を成し、そこにはルーム地方の概観を述べた序文のあとスィヴァス Siwās 以下五一箇所の都市名が原則としてアラブ文字のアルファベト順に出され、各々について短いもので一行、最長一七行の説明が付されている。本稿ではこれら五一箇所の地名のうち、他史料にも現れて少くとも地名の読みの確実なもの（正確な位置不詳なものを含む）三九箇所を選訳する。残りの一二箇所の地名は読み方が不明の上、説明文も短く、今のところこれらの位置を確定しえない。

翻訳に使用したテクストは、Ḥamd Allāh Mustawfī Qazwīnī, *Kitāb-i Nuzhat al-Qulūb*, al-Maqāla al-Thālitha, G. Le Strange (ed.), Leyden & London, 1915. pp. 94–100.[2] を底本とし、一部は同書の Muḥammad Dabīr-siyāqī 校訂本[3] (Tihrān, 1336 Kh. ṣ. 109–116) を参照した。

Nuzhat からの選訳

〈第七章：ルーム地方の諸地域について〉

そこには約六〇の町がある。寒帯 (*sardsīr*) である。往古の学者達はそこを mafsaqa al-bilād（「諸地方の売春宿」）と呼び、預言者のハディースがこれを証明する。預言者―彼の上に平安あれ―は「罪なき者はルームに入らず」と言ったのである。*Masālik al-Mamālik* には次のように出て来る。学者達は「ルーム人たちは Bayt al-Muqaddas を破壊し、そこから捕虜 (*barda*) を連行したので、至高の神は彼らに怒り、そこ（＝ルーム）から捕虜を連行することを慣わしとされた。その時以来ルームから他地方へ捕虜が連行されなかったことは正しく一日もない」と。本書の著者（＝ハムドゥッラー）

は次の如く言う。今此時捕虜がイーラーンからルームへ連行されるのは我々の邪悪な生活の故であると。輝ける言葉（＝クルアーン）はこの事を証言する。至高なる神の言葉は「また我々はその民が悪を行なわない限り、町や村を滅ぼさなかった。」（第二八章五九節末尾）である。我々はアッラーにその怒りからの保護を求めるものである。ルームの国土の境界はグルジスターン、アルマン（＝アルメニア）、スィース（＝小アルメニア）、シャームの諸地方とルーム海に接する。そこの徴税額（*ḫuqūq-i dīwānī*）は帳簿上は今此時三三〇トゥーマーン[4]である。セルジュク朝時代には今時の一五〇〇トゥーマーン以上であった。現在はスィヴァスの町がそこの最大の都市である。

一、スィヴァス Sīwās　第五気候帯（*iqlīm*）[5]に属し、経度は永遠諸島より七一度三二分、緯度は赤道より三九度二〇分。城壁に破損が生じていたのでセルジュク朝のスルターン 'Alā' al-Dīn Kayqubād[7]が加工した石でその城壁を改修させた。そこの気候は寒冷で、産物は穀物、果実、綿である。スィヴァス産の羊毛粗布（*ṣūf*）は有名である。

二、エルビスタン Abulustān　第五気候帯に属する中位の町である。

三、ANQRH[8]　第四気候帯に属し、経度は永遠諸島より七三度、緯度は赤道より三八度。気候は寒冷な方で、産物は穀物、果実、綿である。

四、エルズィンジャン Arzinjān　第四気候帯に属し、経度は永遠諸島より七四度、緯度は赤道より三九度。セルジュク朝のスルターン、アラーウッディーン・カイクバードがその城壁を再建し、加工した石で改修させた。気候は極めて良好である。フラート河（＝ユーフラテス）が町の外を流れている。産物は穀物、果実、綿、葡萄でいずれも豊富である。その徴税額は三三トゥーマーン二五〇〇ディーナールである。[9]

五、エルズルム Arzan al-Rūm　第四気候帯に属し、経度は永遠諸島より七六度、緯度は赤道より三九度四〇分。ここにはこの地方（＝ルーム）においてこれ以上高い建物がない程の壮大な教会（*kalīsiyā*）があり、その内に縦横五〇ガズの高いドームがある。預言者―彼の上に平安あれ―誕生の夜そのドームのアーチのうち幾つかが落下し、どんなに元に戻そうとしても成功せず落下して来る。その教会の向かいには Ka'ba の形をした一マスジドがあり、その縦横ともムスリムたちのカアバに似せて

築かれており、それはカアバの見本（*namūdār*）と呼ばれている。その徴税額は二二〇〇〇ディーナールである。

六、エルメナクArmanāk かつては大きな町であったが、今時は小市（*qaṣaba*）である。その徴税額は七〇〇〇ディーナールである。

七、アクサライAqsarā 第四気候帯に属し、経度は永遠諸島より六八度、緯度は赤道より三八度。セルジュク朝の ʿIzz al-Dīn Qilīj Arslān b. Masʿūd[10] が五六六（＝西暦一一七〇／一）年に築いた。とても良い場所であった。産物は穀物、果実、葡萄でいずれも豊富、良質である。その徴税額は五一〇〇〇ディーナールである。

八、アクシェヒルAqshahr エルズィンジャンの方はそこ（＝エルズィンジャン）から七ファルサングの所にあり、コニヤの方は三日行程の所にある。その徴税額は一三五〇〇〇ディーナールである。[11]

九、アマスィヤAmāsīya 大きな町であった。セルジュク朝のスルターン、アラーウッディーン・カイクバードがここを再建した。産物は種々の穀物であり、気候は良く、清潔である。

一〇、アンタキヤAnṭākīya[12] 中位の町で、第四気候帯に属し、気候は極めて良好である。

一一、AWNYK 一山上の城塞であり、城塞の麓に水を給する一つの町がある。[13] Ḥajjī Ṭaghāy Sūtāy の子Shaykh Ḥasan が築き、チュバン家のShaykh Ḥasan[14] がその町を破壊した。エルズルムから八ファルサングの所にある。

一二、バイブルトBāburt 大きな町であったが、今は小さな町で、少し園林（*bāghistān*）がある。その徴税額は二一三〇〇ディーナールである。

一三、ディヴリイDiwrīrigī 中位の町である。その徴税額は三〇〇〇〇ディーナールである。

一四、デヴェリDawalū 中位の町である。その徴税額は四〇三〇〇ディーナールである。

一五、ハルプトKhartabirt 大きな町で第四気候帯に属する。気候は極めて良好である。その徴税額は二一五〇〇〇ディーナールである。

一六、サムスンSamsūn ルーム海の辺にある船の着く港。

一七、シムシャトShimshāṭ 第五気候帯に属し、経度は永遠諸島より七二度三五分、緯度は赤道より四〇度。大きな町であり、その中には預言者ーの教友ーSafwān b. Muʿaṭṭal の墓廟がある。この辺

にはその実が巴旦杏に似た木があり、実は皮ごと食べられ、蜂蜜より甘く、美味であるが、それが何の果実であるかは誰も知らない。

一八、アンカラ 'Ammūrīya[15] 第五気候帯に属し、経度は永遠諸島より六六度、緯度は赤道より四三度。地名の発音は Angūrīya である。*Jāmi' al-Ḥikāyāt* によればルームのカイサル、アウグストゥス Qusṭās が築いたとされ、彼はその地で秘宝を発見し、それを町の建設に費やしたという。その地の徴税額は七二〇〇〇ディーナールである。

一九、Qālīqalā[16] 第五気候帯に属し、経度は永遠諸島より七八度三五分、緯度は赤道より三九度四〇分。大きな町である。zīluqālī[17] はその地に因んだものである。*Mu'jam al-Buldān* には次のことが出て来る。すなわちその地のキリスト教徒 (naṣārā) の教会 (*bī'a*) の中に一つの家があり、毎歳彼らの断食の最後の日曜日である棕梠の枝 (sha'ānīn) の夜[18]には一箇所が開かれ、そこから白い土が出て来る。その土は tiryāk の如く解毒作用があるが、一ダーング以上服用するのはよくない。もしそうすれば死んでしまう。

二〇、カラヒサール Qarā Ḥiṣār この名前をもつ城塞は幾つかある。カイセリから三日行程のカラヒサールは山腹にあり、徴税額は二五三〇〇ディーナールである。コニヤの境域に Bahrāmshāh の築いたカラヒサールは徴税額一一六〇〇ディーナールである。BWASY のカラヒサール[20]はニイデの境域にあり、徴税額は一四六〇〇ディーナール。Līmūnīya のカラヒサールはエルズィンジャンのアクシェヒルの境域にある。[21]

二一、カスタモヌ Qastamūnīya 中位の町である。その徴税額は一五〇〇〇ディーナールである。

二二、コニヤ Qūnīya 第五気候帯に属し、経度は永遠諸島より六五度四五分、緯度は赤道より四一度。カパドキヤ地方 (kūra-yi Qapadūq) の大きな町である。スルターン、クルチ・アルスランがここに加工した石で城塞を築き、その城塞の内に自らの居住の為に堂々たるアーチ玄関 (*īwān*) を造らせていた。コニヤの城壁と城塞に破損が生じたのでセルジュク朝のスルターン、アラーウッディーン・カイクバードと彼のアミール達が城壁を再建した。加工した石で濠の底から造られた城壁は高く聳え、二〇ガズの深さの濠に更に三〇ガズの高さの城壁である。その周囲は一〇〇〇〇歩を越える。町中には高い建物が築かれ、一二の城門を持ち、その各々の上には城

塞の形の kūshk[22]がある。気候は穏和で、水は山から来る。水の浄化のため城門では水上に堂々たるドームが築かれ、ドームの外側の三〇〇余本の管の中を水が流れている。産物は穀物と綿で他の穀類も多く、良質である。二方面に園林があり、一方は平原側にあるが、そこは現在荒廃している。もう一方は山側のガヴァラ Kawala 要塞の麓にあり、そこは手入れされている。葡萄や種々の果実も穫れる。果実のうちでは黄杏子が極めて甘く、果汁が多い。町は Qarāmān との境界にあるので常時彼らから被害を受け、始終見張りを置いている。偉大な者達の墓廟のうちにはMawlānā Jalāl al-Dīn b. Bahā' al-Dīn Walad —彼の秘密が清められるようにーの墓がある。

二三、カイセリ Qayṣarīya 第五気候帯に属し、経度は永遠諸島より六九度、緯度は赤道より三九度二〇分。Arjāsb 山の麓にある。ここの城塞の城壁はセルジュク朝のスルターン、アラーウッディーン・カイクバードが加工した石を以て築かせた。徴税額は一四〇〇〇ディーナールである。*Mu'jam al-Buldān* には次のように出て来る。すなわち賢人アポロニオス Balīnās はカイサルのためにランプ一つで熱くなる公衆浴場を築いたと。ここには信者の長アリー——アッラーが彼に名誉を与えるようにーの子 Muḥammad b.Ḥanafīya の会合に因んだ場所があり、人々はそこを霊験灼かなる所として大いに有難がっている。

二四、Kāb[23] 中位の町で、第五気候帯に属し、気候は寒冷である。その徴税額は二二一〇〇ディーナールである。

二五、カマフ Kamākh 城塞であり、この城塞の麓に小さな町がある。気候は寒い方である。数箇村がここに属し、徴税額は三四四〇〇ディーナールである。

二六、Lu'lu'h[24] 小さな町で第五気候帯に属し、気候は寒い方である。牧草地が多く、狩場は数え切れない程である。

二七、マラトヤ Malaṭīya 第四気候帯に属し、経度は永遠諸島より七一度、緯度は三九度。ここの境域には堅固な一城砦があり、Qulūdhīya と呼ばれる。[25] アルマゲスト *Almajisṭī* の著者プトレマイオス Baṭlimyūs に縁のある場所である。かつては非常に大きな町であり、気候は極めて良い。流水があり、牧草地が多い。産物は穀物、綿、葡萄、果実でいずれも豊富である。

二八、ニイデ Nakīda 中位の町で第五気候帯に属する。その徴税額は四一五〇〇ディーナールである。

二九、ニクサル Niksār 中位の町で、園林が豊富、果物が多い。その徴税額は一八七〇〇〇ディーナールである。

三〇、Hūshyār[26] カラマン地方にある一城塞である。その地方は山岳、森林地帯で、その中には多くの城塞がある。その地方は小アルメニア、シャーム、ルームとファラングの海沿岸に隣接する。その地の人々は武装した追剝で、ルームの人々と常時交戦している。彼らの頭目たちはセルジュク家の血統につながる。

三一、ウルグン YLQAN Bāzār コニヤとアクシェヒル間の一小市である。ここには世界中に比類ない温泉があり、その畔に高い建物が築かれている。

三二、Zamandū[27] 中位の町で、その徴税額は一四六〇〇ディーナールである。

三三、クルシェヒル Qīrshahr 大きな町である。町の中には高い建物が幾つもあり、気候は極めて良い。その徴税額は五七〇〇〇ディーナールである。

三四、GDWK[28] 小さな町で、気候は寒い方である。その徴税額は一六五〇〇ディーナールである。

三五、Tūz Aghāch[29] 中位の町で、その徴税額は一九五〇〇ディーナールである。

三六、Ziyārat Bāzār[30] 一小市であるが、非常によい所である。その徴税額は一六〇〇ディーナールである。

三七、エイリディル Agrīdūr 一小市で、その徴税額は四〇〇〇ディーナールである。

三八、コチヒサール Qūshḥiṣār 中位の町で、その徴税額は二八〇〇〇ディーナールである。

三九、スィヴリヒサール Siwriḥiṣār 中位の町で、その徴税額は二五〇〇〇ディーナールである。

(注)

(1) ハムドゥッラー・カズヴィーニーの作品については E.G. Browne, *A Literary History of Persia*, Vol. III, Cambridge, (reprint) 1976, pp. 87–100 参照。

(2) この版本からの翻訳が *The Geographical Part of the Nuzhat-al-Qulūb*, G. Le Strange (tr.), Leyden & London, 1919 であり、ルームに関する部分は九五—一〇〇頁。

(3) Le Strange が自らの版本の緒言で述べるように *Nuzhat* は著者ハムドゥッラーの在世中には完全な作品とはなっていなかったらしい。すなわち地名や緯度・経度に遺漏多く、特に地名は手写本により多くのヴァリアントの存する場合が少くない。

(4) トルコ語で「万」の意味を持つ *tümän* がペルシア語に来

入したもの。「万人隊」や「(万人隊を出すべき)地域」の意味でも用いられるが、ここでは「一万ディーナール」の意味である。

(5) イスラームの地理書に現れる iqlīm の語については竹田新「Iqlīm 考—Yāqūt を基に—」『オリエント』二六—二、一九八三、七五—九四頁が参考になる。

(6) 具体的にはカナリヤ諸島をさし、世界の最西端と考えられ、プトレマイオス地理学の本初子午線が通過する場所。

(7) ルームのセルジュク朝第一一代スルターン。在位一二二〇—三七年。

(8) Le Strange はその英訳本の中でこの地名をアンカラと考えているが、説明の内容から見てアンカラはむしろ一八の 'Ammūriya に当ると思われる。本稿注(15)参照。

(9) ルームの全徴税額三三〇トゥーマーンの十分の一強をエルズィンジャンが負担しているのはこの町とその周辺がイルハン国の王領地となっていたためであろう。ルーム・サルタナトよりイルハン国へのエルズィンジャン割譲については拙稿「イルハン国とルーム」『イスラム世界』二三・二四、一九八五、四九頁参照。

(10) ルームのセルジュク朝第五代スルターン。在位一一五五—九二年。

(11) アクシェヒルという名の町は当時ルームに二つ存在した。

(12) ルームにはアンティオキアという地名があったが、西暦一三—四世紀の他史料に現れるこの地名はすべてシリアのアンティオキアをさす。この地名は或いは地中海岸のアンタリヤ Antālīya に当たるものかもしれぬ。

(13) 正確な位置は不詳。Le Strange はその英訳本の中では「取水所」の意味の ābishkhwar を固有名詞としている。一三九六年七月三一日、その五年戦役の途中ティームールはこの要塞を降服させたが、この包囲戦時に要塞で水が欠乏したことが伝えられている。Niẓām al-Dīn Shāmī, *Ẓafar-Nāma*, Felix Tauer (ed.), Praha, 1937, p.155 この記事からも ābishkhwar は固有名詞ではなく、要塞に「水を給する場」の意味に考えるべきであろう。

(14) モンゴルのスルドゥス部出身の有力カアミール、チュバンの孫で、ルームを支配したティムルタシの子。一三四三年没。

(15) Le Strange はその英訳本の中でこの町をアンカラより西方の Amorion と考えている。しかし Le Strange がアンカラに比定している三の ANQRH はその説明の記述に拠ると経度(七三度)から考えてエルズィンジャン(七四度)とマラトヤ(七一度)間の南方にあることになり、現在のアンカラからは余りに離れすぎている。一八の 'Ammūriya は Angūriya とも呼ばれること(一三—四世紀の史料に現れるアンカラの表記は Angūriya)、この町とローマ皇帝アウグストゥスの関係を示す説明の記述、及び緯度・経度(六六度・四三度)がコニヤの北、カイセリの北西、つまり現在のアンカラの位置に合致するところから、この町こそアンカラに他ならない。アンカラ、アウグストゥス神殿については Ankara, *İslam Ansiklopedisi* (Besim Darkot 執筆) 参照。

(16) 正確な位置不詳。*Nuzhat* の第三話 makhlaṣ 中で

Qāliqalā はユーフラテス、アラス、クル三大河の水源となっている山岳地帯として現れる。Le Strange の版本 一九二、二〇九、二一二、二一八頁。

(17) zilū はペルシア語で「粗製の絨毯」の意味。 qālī は Qāliqalā のカーリーであろうが、トルコ語で絨毯の意味の単語 qalī を写した可能性もある。

(18) キリスト教の復活祭一週間前の日曜日。キリストのイェルサレム入城を迎え、市民がオリーヴの枝を振り、棕梠の葉を道に敷いた故事に因む。

(19) イルハン国時代のテリアカについては前嶋信次「テリアカ考—文化交流史上から見た一薬品の伝播について—」『東西物産の交流』誠文堂新光社、一九八二、七八—八一頁に言及がある。

(20) BWASY の読みについてはNWAS のヴァリアントがあり、一四世紀末に完成した史書 *Bazm u Razm* の版本ではこの表記が採用されている。但し、アクサラーイーを校訂した Osman Turan は Yawāsh と読んでいる。'Azīz b. Ardashīr Astarābādī, *Bazm u Razm*, Istanbūl, 1928. s. 278, Maḥmūd Aqsarā'ī, *Musāmarat al-Akhbār wa Musāyarat al-Akhyār*, Ankara, 1943. pp. 105, 106.

(21) 現在のシェビンカラヒサール。

(22) 現在もコニヤに遺るアラーウッディーン・キュシクの如き堅固な建築物をさす。

(23) 正確な位置不詳。イブン・ビービーによればトカト Tūqāt 近傍の一地域。Ibn Bībī, *Kitāb al-Awāmir al-'Alā'iya fī al-Umūr al-'Alā'iya*, Ankara, 1956. pp. 629, 631.

(24) 正確な位置不詳。Ibn Bībī, p. 667. 拙稿「イルハン国とルーム」注(31)参照。

(25) *Nuzhat* の著者ハムドゥッラーはプトレマイオス・クラウディオスの名をクラウディーヤ城砦に結びつけたのであろう。アブル・ファラジ（バル・ヘブラエウス）によれば Qulūdhīya 城砦はアッバース朝第二代ハリーファ・マンスール時代に建設された。Ibn al-'Ibrī, *Ta'rīkh Mukhtaṣar al-Duwal*, Bayrut, 1958, p. 122.

(26) 正確な位置不詳。カラマン地方の記事は特に興味深い。

(27) 正確な位置不詳。拙稿「モンゴル侵入直前のルーム」『オリエント』三〇—一、一九八七、注(23)参照。

(28) 但しFaruk Sümer の最近の研究によるとZamandū 要塞はカイセリ東方 Pazarören 北東の Kus Kale に当たるという。*Yabanlu Pazari*, İstanbul, 1985, s. 33-55,

(29) 正確な位置不詳。イブン・ビービーの記述からはカイセリ近郊の町と考えられる。

(30) 正確な位置不詳。拙稿「モンゴル侵入後のルーム」『東洋史研究』三九—二、一九八〇、注(43)参照。Ibn Bībī, p. 613.

位置不詳。